

Title	第三史觀の可能性(下)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	經濟論叢 (1935), 40(5): 824-845
Issue Date	1935-05-01
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/130589">http://dx.doi.org/10.14989/130589</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第 卷十四第

行發日一月五年十和昭

(禁 轉 載)

## 論 叢

傭人税に就きて ..... 法學博士 神戸正雄

利子の社會的説明 ..... 文學博士 高田保馬

第三史觀の可能性 ..... 文學博士 米田庄太郎

## 時 論

日支貿易の促進について ..... 經濟學博士 谷口吉彦

## 研 究

ロツシヤーに於ける國民經濟の意義 ..... 經濟學士 白杉庄一郎

百貨店出張販賣存續の條件 ..... 經濟學士 堀 新一

株仲間の信用保持機能 ..... 經濟學士 宮本又次

## 說 苑

中島治平と山口藩の洋式工業 ..... 經濟學士 堀江保藏

カルテルと景氣變動 ..... 經濟學士 田 杉 競

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 第三史觀の可能性 (下)

米田 庄太郎

- (一) 哲學の根本的方針に關する緒説の一般的考察、(二) 辨證法的唯物論の主張の考察、(三) フイヒテの説の考察、(四) デイルタイの世界觀典型論、(以上前號所載) (五) ジムメルの典型的精神性論、(六) 世界觀的或は哲學的人格典型説、(七) 哲學の第三根本方針、

### 五ジムメルの典型的精神性論

私は私の學問的生活に於て比較的早くから、ジムメルの諸著作を閱讀して居たから、上に述べしが如き意味での世界觀的人格典型説の如きものが、私の腦裡に發達して來たことに就ては、比較的早くから彼の影響を受けて居たのであらうと思はれる。そうして私は此の問題に就て具體的に強き印象を受けて居たのは、彼の「カント」、「ゲーテ」、「シヨベンハウエル及びニーツチエ」等の諸著者であるが、併し理論的一般的に私の考へを固めるに當つて、決定的な影響を受けたのは、彼が千九百十年に公にせる著書 *Hauptprobleme der Philosophie* 第一章に於て、彼が哲學の本質を究明せんとする場合に論述して居る見解である。それで此處に其の見解に就て少し詳

しく述べて置きたいと思ふ。

今ジューメルシュテファン・ジューメルの論ずる處によると、總ての哲學者に共通するもの或は共同的なるものは、實在の全體を把握して、之れに反動する特定の態度、即ち哲學的基本態度と稱せらる可きものにして、そうして其の哲學的基本態度は、精神の最とも内部的な或は最とも深奥な統一によりて實現されるものである。されば哲學のもろゝの特殊性は、つまり右の點に注目すれば自から了解されるのである。ジューメルはかゝる見地からして、先づ哲學の一特殊性として、經驗的或は數學的精密知識の客觀性に對して、哲學的諸學說の主觀性と稱せられて居るものの眞義を究明せんとしたのであるが、其の際彼は典型的精神性なるものを論じて居る。そうして夫れが即ち私が、私の世界觀的人格典型説を築き上げる、主要な理論的基礎となさんとするものであるのである。

ジューメルシュテファン・ジューメルの論ずる處によると、吾人の知力の統一的反動が行はれる物デイングの範圍が廣大であればあるほど、其の反動に於て知力の個性が益々自由に表現されるであらう。是れ其の範圍の廣大になるにつれて、知力が決定的要素を選択する自由、又は諸要素の本質的結合を選択する自由は、只一の要素又は少數の要素だけが反動を喚起する場合に於てよりも、より大であるであらうからである。異なる諸事物の圈の範圍が益々擴大するにつれて、總ての個人に對して同様に妥當する仕方にて反動する必要は極限價值零に近づく。されば世界觀と稱せられるものは、諸人格性の差異方面に最とも多く依存し、最とも完全な又最とも純粹な客觀性を保有するが如くに見ゆる全體

の形像さへも、何れかの個別的なものの客觀的形像が反映するを常とするより遙かにより多く、夫れの運載者の特殊性を反映して居るのである。或人が藝術に就て云へるが如くに、藝術は一の氣質 *temperament* を通して見られた一の世界形像であるならば、哲學は一の世界形像を通して見られた一の氣質であると云ひ得られるであらう。只此處に注目す可きは、哲學の此の特殊性は各個人固有の不可比性或は特異性を意味せず、各個人が卒直に總ての他の個人とは異なる點に觸れないと云ふことである。是れ哲學する人々の數があるだけ、哲學の數が存在するのではないのみならず、世界觀を決定する哲學の原本的動機の數は甚だ制限されて居るからである。此等の動機は幾千年間を通じて繰り返して現はれ、相分離し、相互に組み合ひ、色合を變じ、服裝を更へて現はれて居る。併し其の數は只極めて徐々に増加するだけである。そうして世界及び人生に對する種々相異なれる哲學的反動が、此の如くに分量的に僅かであると云ふことは、つまり哲學的反動は個人的契機によりて決定され得るものでないと云ふこと、即ち哲學の主觀性なるものは、何れの場合に於ても、決して一の恣意や主觀的氣まぐれの變動によりて、左右され得るものでないと云ふことを證示して居る。此處には寧ろ甚だ根柢の深い、又傳統的な概念を以ては直ちに記述し得られない、一の精神的範疇が活動して居るのである。一方に於ては、何れの哲學の起源或は根元をも、夫れの創說者の人格的或は個人的諸作用から究明せんとするは全然謬つて居る。是れ一般に人格的或は個人的なものと云はれて居るもの、氣質、運命、環境などは、まさしく其の

哲學者と他の無數の哲學者とに共通する一般的なものであり、かくて絶對的に只其の哲學者に於てのみ生まれ、生長し、何れの他の哲學者に於ても生まれ、生長しない其の哲學者の創作或は創造物を説明し得ないからである。創造的人間に於ける固有の又唯一の人格的個人的なものと云へば、夫れは寧ろ其の人の仕事、或はまさしく此の仕事を目差し又目差し得る、そうして何れの他の仕事をも目差さず又目差し得ない、過程である。尙ほ又一の個人に於ける他の個人と比較し得られない特異點は、其の個人の創造物の充當的理由ではない。是れ若しそうであるならば、其の創造物が他人によりて理解されると云ふことや、又他人に對して妥當すると云ふことや、他人によりて表象されると云ふことや、無數の超個人的連結に入り込むと云ふことなどは、全く不可能となるからである。かくて實在全體に對する反動の其の運載者は、決して全く直接な個性ではなく、夫れは其の個性の一の特殊な層シヒト或は變容モディファイケーションに於て求められねばならぬ。併し他方に於ては、又論理的連鎖や、物件的或は實質的知識及び夫れの諸方法も、やはり哲學の起源を決定しない。と云ふのは此等のものは總て一の文化時代の多數の思想家に共同的であり得るし、又彼等の具體的知識の間には何等の矛盾も存立することが許されないのであるが、しかも彼等の哲學的世界形像は最も鋭く相異なり、時には完全な相互的否定に達するまでも、分離して居るからである。されば人間に於ては、個人的主觀性の彼岸にあると同じく、又一般的に妥當する論理的客觀的思惟の彼岸にもある、一の第三のものが存在せねばならぬ。そうして此の第三のものが即ち哲

學の根元地であらねばならぬ。實に哲學の存在は夫れの前定として、かゝる第三のものが現存して居ることを要求するのである。吾人はかゝる第三のものを甚だ大約的であるが、典型的精神性の層・die Schicht der typischen Geistigkeit と稱し得る。是れ典型なるものは個別的現實的個人と覆合しなければ、又人間及び人間の生活の彼岸にある一の客觀性を表現するのではない處の、一の構成態であるからである。そうしてかゝる構成態としての典型は、特定の精神的力即ち夫れの活動内容は主觀的個人的存在者に屬するのではないが、さればとて主觀に對立する一の客觀的なもの模寫でもない處の特定の精神的力を、吾人の中に事實上發現するのである。かくて吾人に於いて一の感情が、屢々大なる本能的確實性を以つて、吾人が全く吾人自身の個人的及び主觀的なものとして承認するが如きもろゝの確信及び氣分と、一定の他のもろゝの確信及び氣分（即ち夫れに對しては吾人は同様に客觀的證明を呈出することが出来ないが、併し實際上他人と或は總ての他人と分有して居ると想像し、吾人の中に一の普遍的なものが語るとか、己れ自身によりて己の内容から正當化されて居る一の深奥な普遍的な根基から、其の思想或は其の感覺が吾人の中に突然出現するとか云はれる場合に意味されて居る其等の確信及び氣分）とを切り離す、或は分離するのである。恐らくは藝術の花床も亦此處にあると思はれる。確かに藝術家は一の純人格的或は純個人的必然性から創作する。かくて各藝術家は同じモデルからして、總ての他の藝術家とは異なれる藝術作品を作成するのである。しかも其等の作品の何れも、吾人が藝術的真と稱

する或物、又は藝術的眞として普遍的に是認さる可きであると云ふ要求を具有して吾人に現はれる或物を有つて居る。かくて人格性から生まれる其の個性的な生産性或は創造性は、明かに一の典型的な生産性或は創造性にして、そうして夫れの單獨的特異的創作物は、客觀或は物から生ずるのではなくして、人間典型或は人間の一典型が、依て以て個性的現象の中に活動する其の固有の精神層が、此處に藝術創作者に於て發現して居るが故に生ずる處の、單獨性を超越する妥當性を具有して居るのである。宗教的創造の確信的膨脹も亦、此の地盤に於て生起するものである。宗教的天才が彼の最とも深奥な生活、彼のもろゝの感動或は不安及び正覺の神秘的に主觀的なものを説教することによりて、其等の感動及び正覺は無數の他の人々に對して眞理の威嚴性を獲得するのである、(たとひ其等のものは何等の客觀的原本に即して、否な屢々論理的規範に即してさへも、決して正當として證明され得ないとしても)。「人類の守神」が其等の正覺者の口を借りて語ると云ふが如き、漠然たる言ひ表はし方の中に、心意に於ける超個人的なものに根さず力、或は秘密な仕方にて之を代表する力が、個人に於て、且つ直接に個人から發現して居ることを指示する處の、とにかく正當な本能が生動して居るのである。そうして哲學的大偉業を特質附ける二つの事柄の驚く可き合致、即ち一方面的決斷性、とり代はれ難き人格性の世界觀人生觀を論述すると同時に、一の普遍的に人間的なもの、超個人的必然性及び生命一般に於て基礎附けられて居るものを與へると云ふこと、此のことはつまり哲學に於ては一の精神的個性の典型的なものが、



即ち全然只自己の法則にのみ従ふ一の人格性の内部的に客觀的なものが、發動して居ると云ふことを、前定して居るのである。

以上述べし處によりて、哲學の眞理觀念は、夫れが存在或は實在に對する最後の決斷及び全體的反動を包括する限り、科學の眞理概念と異なつて居ることが明かに了解される。哲學は科學のなすが如くに、物の客觀性デイングを描寫するのではなく、常に物の一定の把握デイングに於て現はれて居る人間的精神性の諸典型を描寫するのである。哲學のもろゝの主張にありては、一の對象との如何様にか了解されたる合致が、問題となるのではなく、其等の主張が哲學者の存在其物、或は哲學者に於て生動して居る人間典型（夫れは諸個人の一定の一範疇を表示するにせよ、又は或度に於て各個人の中に現存する一要素を形成するにせよ）を表現すると云ふことが肝要である。併し是れは決して哲學は一の心理的告白として、或は自己描寫として、解さる可きであると云ふが如きことを意味するのではない。若しそう云ふ意味に解されるならば、哲學は各々の心理學の如くに一般に一の客觀を有し、そうして之れと合致するか、しないかによりて、哲學の眞偽が決定されねばならなくなるであらう。哲學者の人格性とは哲學者の主張の内容を意味するものでない。哲學者の主張は總て何等かの客觀的實在を目差して居るものにして、そうして哲學者の人格性は其等の實在の中に己を表現して居るのである。其等の主張を運載する特殊な人間典型は、他の諸學問内に於ける如くに、主張其物の中に没却して仕舞ふのではなく、まさしく其の中に保持されて居る

のである。哲學は一の頭腦の自己反映ではなく、其の頭腦の中に、其の頭腦の主觀的偶然的實在性に從ふて畫かれて居るのではなく、此の人間典型に相應する様に畫かれて居る世界であるのである。是れ人間の精神種類は一般に、夫れとは異なつて組織されて居る存在者にありては、他の諸内容及び諸形式によりて取り換へられねばならない一定の諸内容及び諸形式を要求する如くに、人間の精神種類の個々の諸典型は、其等の一定の諸内容及び諸形式の特殊的色附け、結合及び方向附けを要求するからである。そして其等の特殊的色附け、結合及び方向附けの諸原理は、大哲學的諸理論の中に現存するのである。吾人はかゝる哲學觀を、哲學的思惟は人格的なものを物件化し、物件的なものを人格化すると云ふ公式に於て、包括することが出来るであらう。蓋し哲學的思惟は、世界に對する一の人格的態度の最深な又最後のものを、一の世界觀の言葉に於て表現し、そしてまさしく夫れ故に、常に人間の本質諸特徴及び本質諸典型の間の差異に從ふて、何れが選擇されるかゞ決定される、其等のもろゝの方向線及び全體意義に相應する、其の世界形像を表示するからである。

此の場合に、夫れの對象に關しては、(物件的或は實質的學問的立場 *sachlich-wissenschaftliche Standpunkt* 或は普遍的人間的立場から判斷される以上)、全く誤つて居る様な主張によりて、人間の本質諸特徴及び本質諸典型が、完全な明亮性、透徹性、及び確信力を具足するに至るまでも、展開されると云ふ様なことが確かに有り有る。否な時には、一の學說の客觀的誤謬が、其の學說を運載する精神的典型に關する真理を、益々深く且つ益々明亮に表現すると云ふ様なこともあり得るのである。されば恐らくは真理の概念は、一般的に哲學の一の價值を表現する爲めに完全に適合する概念ではあるまい。蓋し真理は常に一の

思想構成物、詳しく云へば一の現實的或は觀念的存在が夫れに對立し、又夫れと如何様にか合致して夫れの眞理を決定する處の思想構成物に、附着して居るからである。然るに哲學にありては思想構成物の性格が夫れ自身で決定的であるので、此處では思想構成物は存在として、即ち夫れに於て直接に表明されて居る精神的方面及び組織の意義、并に此の表明其物の確信的誠實性、深奥性及び明亮性に従ふて、夫れの價值を運載して居るのである。かくて哲學にありては客觀或は事物によりて確定する可き諸主張の眞理が、最後の價值標準であるのではなく、其等の主張の中に生動し、自現する典型的存在が、最後の價值標準であるのである。さうして只此の點に着目することによりてのみ、一定の人々が今日にありても、ソクラテスやプラトリーに於て、又トーマス・フオン・アクイノやギョルダノ・ブルノーに於て、又スピノツアやライブニッツに於て、世界に對する彼等の關係に於て決斷及び救済を見出して居る所以が了解し得られるのである。精神史の發達は、明かに觀察し得られる仕方にて、客觀に即して方面附けられて居る眞理價值が、もろ／＼の大哲學に於て客觀化されて居る精神的存在の意義へ、如何に還元されるかを示して居る。其等の大哲學が物 *Things* の當體的或は實質的活動或は作用に關する主張として現はれる瞬間に於ては、云ふまでもなく、此の方面に於ける夫れの論證力及び其の論證力の批判が重要視されて居る。併し此の事は後には段々にどうでもよいことになる。之れに反して、實在に對する一つの現實的立場、或は客觀的眞理問題に觸れない態度の表現としての其の主張或は學說の內面的意義は、常に存續して行くのである。今日に於ては恐らくはプラトリーの理念說其物、或はストア及びスピノツアの汎神論其物が正當であるかを、又對立の合致としてのニコラウス・クーザヌスの神の概念其物、或はフイヒテの世界創造的自我其物が事實に對應するかを、又シェリングの自然と精神との同一性說其物、或はショペンハウエルの意志形而上學其物が眞理であるかを、眞劍になつて尋究する人はあるまい。總て此等の主張其物は屢々又的確に否定されて居る。しかも此等の謬見に於て、實在に對する夫れの反動を固定させた當面の人間的典型は、總ての否定、反駁に抵抗して存續し、夫等の諸主張諸學說に、己れに固有の度合に於て不減な意義を賦與して居る。其等の學說は眞理としての夫れの標準を、何れの場合に於ても、夫れが當體的實質的主張を目がけて行く點から與へられて居るのでなく、夫れが出發せる點、出て來た點から與へられて居るのである。

却說ジューメルは哲學の本質を論究せんとするに當つて、哲學的學說或は哲學の所謂主觀性なるものの眞義を、又夫れに従ふて哲學的眞理の眞義を以上述べしが如くに究明したのであるが、私

は私が世界觀的人格典型説と稱せんとするものの理論的基礎を確立せんとするに當つて、直接に教へられる處最とも大なるは、彼が上に述べし如くに、哲學の所謂主觀性なるものの眞義を究明せんとする場合に論述して居る處の、彼が人間の典型的精神性と稱して居るもの、及び夫れの區別に關する彼の思想であるのである。そうして此の點に於て私は彼の説に負ふ處如何に大なるかは、次の節に於て述べるが、尙ほ私は私の世界觀的人格典型説を確立し、又展開せんとするに當つて、マックス・シェラーが彼の諸著作に於て論述して居る哲學本質論から示教を受ける處少ないのである。そうして彼の哲學本質論は幸ひに彼の著書 *Vom Ewigen im Menschen. Erster Band, Religiöse Erneuerung. Halbband I. ① Von Wesen der Philosophie und der moralischen Bedingung des philosophischen Erkennens* に於て、一般的に論述されて居るから、此處に夫れによりて私が特に影響を受けた彼の哲學本質論の方面に就ても、少しく述べて置きたいと思ふて居たが、ジューメルの説に就て少し詳しく述べ過ぎたが爲めに、其の餘白はなくなつたし、且つ後に哲學の第三方針の根本原理や、第三史觀の根本原理を論述する場合には、是非マックス・シェラーの思想に論及せねばならないから、此處では省いて置いて、其の場合に一緒に述べることとしたと思ふ。そうして是れより次の節に於て、私の世界觀的人格典型説の大要を簡単に述べることとする。

## 六世界觀的人格典型說

さきにも少しく述べて置いた様に、今日私が世界觀的人格典型と稱して居るものの概念は、甚だ漠然たる形態に於てあるが、早くから私の頭の中に生まれて居たのである。併し私が此の概念を比較的に明確に規定するに至つたのは、フィヒテ、デイルタイ、ジューメル等の思想の影響、殊に前節に於て述べし處の、ジューメルが典型的精神性と稱するものの概念の影響によりてである。そうして少なくとも今日の處では私は私の世界觀的人格典型の概念を一般的に規定し、又夫れの哲學的意義を一般的に究明して、以て私の世界觀的人格典型說を一般的理論的に基礎附けんとするに於て、前節中に述べしが如くに、ジューメルが彼の典型的精神性と稱するものの概念を一般的に規定し、又其の哲學的意義を究明して居る以上に、根本的には何物をも呈出することが出来ない。要するに私は最とも直接には、ジューメルの典型的精神性説によりて、私が漠然ながら多年抱いて居た哲學本質論を理論的に確定し、展開し、以て私の世界觀的人格典型說を根本的に確立せんとして居るのである。そうして私が私の世界觀的人格典型說に於て、夫れの最とも根本的な問題として目下考究して居るのは、第一には世界觀的人格典型の概念の一般的規定及び夫れの哲學上の一般的意義の問題、第二には世界觀的人格典型の本質的構造及び歴史的形一般の問題、第三には世界觀的人格典型の一般的本質諸形態の區別或は根本的種類別、及び各一般的本質形態或

は各根本的種類の比較的に詳しき分類の問題等の、三問題であるのである。

然るにジムメルは前節に述べ處によりて示せる如く、典型的精神性の概念の一般的規定、及び夫れの哲學上の一般的意義を、稍々組織的に論述して居るだけであつて、換言すれば私が私の世界觀的人格典型説の第一の問題と認めるものを、稍々組織的に論述して居るだけであつて、私が第二の問題と認めるものに就ては、私の調らべた限り、彼の多數の著作中何處にも組織的に論述して居ない。又私が第三の問題と認めるものに就ても、殊に私が先づ第一に最も重要視して居る、世界觀的人格典型の一般的本質諸形態の區別或は根本的種類別に就ては、彼はやはり彼の多數の著作中何處にも組織的には論述して居ないと思ふ。但し彼が此の方面に於て最も力を注いだのは、カント、ゲーテ、シヨペンハウエル、ニーチエ等の大哲學者の哲學體系を詳しく分析し、直觀的に洞見して、夫れ夫れの典型的精神性を究明しようとする、即ち「一の世界形像を通じて一の氣質を見よう」とすることであつた。尙ほ彼は彼の哲學上の諸著作中斷片的であるが、其の他の大哲學者の思想體系或は世界形像を通じて、夫れ夫れの氣質、即ち典型的精神性を洞見し把握しようと企だてゝ居る。そうして其等の諸研究は、云ふまでもなく、私の世界觀的人格典型説を詳しく發展させる爲めには、甚だ貴重な資料であるのである。尙ほ方法論上から考ふれば、ジムメルの如く先づ個々の大哲學者の思想體系の分析的研究及び直觀的洞見によりて、夫れ夫れの典型的精神性或は世界觀的人格典型を究明し、然る後に夫れの一般的本質諸形態或は根本的諸

種類の區別を考察することが、一良法であると云ひ得られる。併し私は先づ本質直觀の方法によりて、世界觀的人格典型の一般的本質諸形態を區別することが出來ると考へ、又此の場合にはかゝる方法は、問題の性質上最も適切であると考へて居るのである。(但し一般的本質諸形態の各々に就て夫れの亞典型を區別する爲めに研究することが必要であると思ふ。)

却說私は私が世界觀的人格典型説と稱するものに於て、先づ夫れの最とも根本的な問題として考究して居る三問題中、第一の問題に就て、之を根本的に論述せんとするに於ては、少なくも今日の處では、私は前節に於て述べし如くにジムメルが典型的精神性に就て論述して居ること以上に、何物をも考へ得ないのであるから、此處では此の問題に關しては特に論述することを省き、直ちに第二及び第三の問題に就て論述することとするが、夫れに就ても本論文に於ては残る紙面は多くないから、第二の問題に就ては、只世界觀的人格典型の構造一般を、又第三の問題に就ては、只夫れの一般的本質諸形態或は根本的諸種類の區別を、簡單に論述するだけに止めざるを得ない。

先づ世界觀的人格典型の構造一般に就て考察するが、今私が世界觀的人格典型と稱するものの一般的概念は、私がさきに述べし如くに、ジムメルが典型的精神性と稱せるものの一般的概念に従ふて、理論的に規定せんとするものにして、要するに夫れは先づ人格典型一般としては、人間に於ける個人的主觀性の彼岸に存在すると同時に又、一般的に妥當する論理的客觀的思惟の彼岸

にも存在する一の第三の精神的層（シビト）或は精神的範疇、換言すれば個別的現實的個人と複合しなければ、又人間及び人間の生活の彼岸にある一の客觀性を表現するのでもない一の構成態にして、そうしてかゝる層或は構成態として特定の精神的力、即ち夫れの活動内容は主觀的個人的存在者に屬するのではないが、さればとて主觀に對立する一の客觀的なものの模寫でもない特定の精神的力を、吾人の中に事實上發現するものである。但しかゝる人格典型一般としては、夫れは只哲學の根元地であるだけでなく、更に藝術や宗教の根元地でもあるのである。そうして夫れが哲學或は世界觀の根元地、即ち世界觀を產出し、創造する人間の精神的層として考へられる場合に、私は之を特に世界觀的或は哲學的人格典型と云はんとするのである。然るに世界觀或は哲學體系の一般的本質的なものと云へば、夫れは即ち人間精神の最とも深奥な統一によりて實現される處の、實在の全體を把捉して、之れに反動する特定の態度であるから、かくて私は世界觀的或は哲學的人格的典型とは、一般的にはつまり人間精神の最とも深奥な統一によりて實現される處の、實在の全體を把捉して、之れに反動する特定の態度が、依つて以て決定される人格典型であると、云はんとするのである。

私は私が世界觀的或は哲學的人格典型と稱するものの概念を、一般的には右に述べし如くに規定せんとするのであるが、然らば夫れの本質的構造はやはり一般的に考察すれば、如何なるものであるか。此の問題を考察するに當つて先づ注目すべきは、人間は抽象的一般的には如何なるも



のであるにせよ、具體的な現實にあるがまゝの人間は、何れの場合に於ても歴史的社會的存在者であると云ふことである。少し詳しく云へば、具體的な現實にあるがまゝの人間は、何れの場合にありても、先き立てる諸時代の連續としての一定の時代の、一定の社會生活の中に形成されて居る存在者であると云ふことである。さればかゝる存在者として人間の世界觀的人格典型の本質構造を究明せんとするに當つて、吾人の先づ着目すべきは其の時代の一般的傾向、或は夫れの特長とも稱せられるものである。何人も彼的人格典型の構造に於て、彼が生まれ成長する時代の一般的傾向或は精神の影響を受けて居ないものはない。そうして私はかゝる時代的影響を、人間的人格典型の時代的契機或は構造要素と稱したいと思ふ。如何なる偉人、天才家も時代の子であるとも云はれて居ることによりて、吾人は人間の人格典型に於ける時代的構造契機或は要素の重要性を理解することが出来る。次に吾人の着目すべきは人間の人格典型の構造契機或は要素としての、一定の時代の一定の社會的生活に於ける、一定の民族、一定の階級、一定の職業等が及ぼす形成的諸影響である。何れの時代の何れの社會に於て生まれ、生長し、生活する何れの人間も、彼的人格典型の形成に於て、彼が屬する民族、階級、職業等の深刻なる影響を受けて居る。そして私は此等のものの影響を夫れ夫れ人間の人格典型の構造に於ける民族的契機、階級的契機、職業的契機等と稱したいと思ふ。尙ほ人間の人格典型の形成に於て、人間が其の中に生まれ、生長し、生活する地理的環境が、種々の方面に於て深刻な影響を及ぼして居ることは疑はれない。

私はやはり之を人間の人格典型の構造に於ける地理的契機と稱したいと思ふ。

今何れの時代の何れの社會に生れ、生長し、生活する何れの具體的現實的な人間の人格典型の形成に於ても、右に列擧せるが如き時代、民族、階級、職業、地理的圓境等が重大な影響を及ぼして居ることは、注意深く考察する何人も、之を觀破するにさほど大なる困難を感じないことであらうと思はれる。かくて吾々は其等のものの影響から生ずる結果を、夫れ夫れ上に述べし如くに人格典型の構造の時代的、民族的、階級的、職業的、地理的諸契機或は諸要素と稱し、そうして人間の人格典型の構造は、一定の仕方に於ける其等の諸契機或は諸要素の結合によりて、組成されると考へることが出来るのである。されば私は其等の諸契機或は諸要素中の、何れかの只一つのみを偏重して人間の人格典型の構造を究明せんとするは、決して正當な考察法ではないと考へ、隨ふて人間の人格典型構造論に於て、狹義の歴史學的理論或は時代論的理論、民族學的理論、階級論的理論、職業論的理論、地理學的理論等と稱し得られる様な諸理論は、何れも偏狹なものであるとして排斥したいと思ふ。

却説人間の人格典型の構造の諸契機或は諸要素として、上に列擧せるものの重要なものは、恐らくは何人も疑ふまいと思はれるが、併し只其等の諸契機或は諸要素が一定の仕方に於て結合されて居ると云ふだけで、人間の人格典型が完全に構成されるのでない。否な更に最とも中核的な一契機或は一要素として、一定の或物が夫れに加はるに非らずば、一層嚴密に云へば一定の或物が

其の中核として本來存立するに非らずば、さきに述べしが如き意味に於ての、第三の精神的層シキト或は構成態としての人格典型は決して成立し得ないのである。然らば其の一定の或物とは如何なるものであるか。夫れは上に列舉せる諸契機或は諸要素の如くに、比較的に容易に觀破され、辯別され、記述され得るものでない。ジューメルがさきに述べし如くに、人格典型を底深い、そうして傳統的諸概念を以て直ちに記述し得られない一の精神的範疇と見たのは、つまり人格典型はかゝる一定の或物を本來具有し、之を中核的契機として、上に列舉せる諸契機を一定の仕方にて結合することによりて、成立するものであるが爲めであらうと思はれる。

今人間の人格典型の構造に於ける中核としての一定の或物は、上に列舉せる諸契機或は諸要素とは異なりて、特に人間の個性と密接に結び附いて居るもの、個性を離れては存立しないものであるが、しかも直接な個性、あるがまゝの個性其物ではない。若しそうであるならば、夫れは決して典型、即ち個性的なるものと普遍的なるものとの特異な結合態としての典型を、構成し得ないであらう。かくて吾人は其の一定の或物とは、つまり人間の個性と一定の普遍性との融合によりて構成される、人間の個性の特異な層或は姿であると考へねばならない。要するに夫れは一定の人間圈クライス（其の圈内に包有される人間の數の大小を問はず）に普遍的な人間の個性の特殊な層、或は方面或は姿であるのである。私は之をあまり適切な云ひ表はし方ではないかも知れないが、便宜上假りに、人間の人格典型の中核としての個性的普遍的統一契機或は要素と稱して置きたい。

と思ふ。但し此の個性的普遍的統一契機も、其の歴史的形成に於ては、時代、民族、階級、職業、地理的圖境等の影響を受けて居るが、併し夫れ自身に於ては、其等のものの影響から獨立する固有の存在を有するものである。

人間の人格典型の本質構造は、一般的に考察すると、大約右に述べし如くに、個性的普遍的統一契機が中核となり、時代的、民族的、階級的、職業的、地理的諸契機等を、一定の仕方にて結合することによりて成立するものであると思はれるが、かゝる人格典型は實に哲學の根元であるだけでなく、更に宗教や藝術の根元地でもあるのである。そうして夫れが特に世界觀或は哲學との關係に於て、即ち世界觀或は哲學が生まれ、生長し、發展する根元地又は花床として考へられる場合に、此處に私が特に世界觀的或は哲學的人格典型と稱せんとするものが成立するのである。人格典型の本質構造一般に就ては、此處では是れまで述べ來りし以上に詳しく又深く究明する餘白はないから遺憾ながらそれだけで了り、そうして特に世界觀的人格典型の構造に就ては、紙面の都合上、次にやはり簡單ながら夫れの本質諸形態或は根本的諸種類の區別を論述する場合に、其の中を含めて述べることにする。

却說世界觀的人格典型の本質諸形態或は根本的諸種類の區別を考察するに當つて、吾人の先づ注目すべきは、世界觀的人格典型の構造に於ける中核的契機としての個性的普遍的統一契機である。是れ既に述べし處によりて察知される如く、此の區別はつまりは個性的普遍的統一契機に於

ける根本的區別によりて、決定されるものであるからである。されば此の點に注目せずして、世界觀の本質諸形態或は哲學の根本方針を、只時代や民族や階級や地理的環境などの差異のみによりて區別せんとするは、何れも正當でない、少なくとも充分には深奥でないと思はれる。

さきに述べ如く、哲學の根元地としての世界觀的人格典型の構造に於て、時代的契機は一の重要な契機であるから、時代によりて哲學或は世界觀に種々なる差異が現はれて居るのは當然である。かくて吾人は古代哲學、中世紀哲學、近世哲學等の夫れ夫れの特質を辯別し得るのである。同様に民族的契機も亦一の重要な契機であるから、夫れによりて諸民族の哲學或は世界觀が、夫れ夫れ特色を發揮して居るので、かくて吾人は大約的であるが、獨逸哲學、佛蘭西哲學、英國哲學、印度哲學等々を區別し得るのである。そうして階級的契機も亦一の重要な契機であるから、貴族哲學とか平民哲學とか、又はブルジョア哲學とかプロレタリア哲學とか稱せられるものを區別し得るのである。更に地理的契機も亦一の重要な契機であるから、夫れによりて吾人は北方哲學或は北方世界觀と南方哲學或は南方世界觀との區別や、東洋哲學と西洋哲學との區別の如きものを、立て得るのである。

併し私の考へる處によれば、其等の諸契機によりて決定される哲學或は世界觀の諸區別は、何れも哲學或は世界觀の根本方針の區別ではなく、そうして其の根本方針の區別は、只私が假りに個性的普遍的統一契機と稱するが如きものの區別に基いてのみ、決定されて居るのである。此處

に此の事を究明する爲めには、先づ哲學或は世界觀の根本方針とは何を云ふかを考察して置かねばならないが、此の問題に就ては既に述べし如く、從來一般に行はれて居る見解によれば、觀念論と唯物論とが即ち其の根本的の方針であるのである。そうして私も此の見解を承認して居るのであるが、併し私は只此等の二者のみが、哲學或は世界觀の根本方針にして、其外には根本方針は一も存在しないと見ることに賛成せず、二者の外に第三の根本方針を認めんとするのである。しかも先づ觀念論と唯物論との二者を以て、哲學の根本方針と認めるのであるから、此處では此處の二者に就て、之を哲學の根本方針と認める以上、哲學の根本方針の區別は、根本的には決して時代や民族や階級や地理的圍境などの區別に基いて決定されるものでなく、只私が世界觀的人格典型の構造の個性的、普遍的契機と稱するものの區別に基いてのみ、決定されるものなるを、簡單に指示して置きたいと思ふ。

今觀念論と唯物論とが哲學の根本方針であると見るに於ては、此の區別は時代によりて根本的に決定されて居るものでないことは、夫れ夫れの時代には、兩者の何れかゞ他よりも優勢を振ふて居るが、しかも何れの時代に於ても兩者が並存して居ることによりて推知される。如何に觀念論が勢力を振ふて居る時代にありても、唯物論は決して消滅して居ない。逆に唯物論が大なる勢力を振ふて居る時代にありても、同様に觀念論が全く消滅して居るのでない。又民族の差異によりて制約されて居る哲學の差異は、哲學の根本方針の差異でないことは、何れの民族の哲學に於

でも、觀念論と唯物論とが並存して居ることによりて明かである。但しより多く觀念論的であるか、又はより多く唯物論的であるかが、民族の特性によりて制約されて居ることがあるが、併し決して夫れによりて根本的に決定されて居るのでない。又マルクス主義唯物論哲學者は、ブルジョア階級の哲學は觀念論的であつて、プロレタリア階級の哲學は唯物論的であると認め、哲學の根本的ニ大方針は根本的には階級の區別によりて決定されて居るものの如く論じて居るが、併しブルジョア階級内にありて觀念論を遵奉する哲學者があれば、唯物論を遵奉する哲學者もあり、又プロレタリア階級内にありても、觀念論を遵奉する人々も、唯物論を遵奉する人々もある。此の問題に就て私が大に興味を感じて居るのは、今日の露西亞の哲學者間に於て見出される一定の傾向である。即ち彼等は相互に他人の唯物論を根本的には觀念論的であるとして、非難し合ふて居ることである。要するに私は哲學或は世界觀は時代、民族、階級等の差異によりて制約される處少なくないが、しかも夫れの根本的方針の區別を決定するものは、其等のものの差異ではなく、其等のものよりは一層深奥なるものに於ける差異、即ち私が世界觀的人格典型の構造の、個性的普遍的統一契機と稱せんとするものに於ける差異であると考へるのである。

甚だ簡單ではあるが、以上述べ來りし處によりて指示せる如く、私は先づ從來一般に哲學の根本方針の區別として認められて居る觀念論と唯物論との區別は、決して只時代や、民族や、階級などの差異によりてのみ根本的に決定されるものでなく、其等のもの以上に深奥な人格的な或物、

即ち吾人の精神の個性的普遍的統一層によりて決定されるものと考へるのであるが、併し夫れと同時に哲學の根本方針としては、從來一般に考へられて居た如く、又今日露西亞の辨證法的唯物論者が大に強調して居る如く、只觀念論と唯物論との二者が存立するだけであつて、其の外には如何なる根本方針も存立しないと見るのは、正當でなく、二者の外に更に第三の根本方針と稱せらる可きものの存立し得ること、否な存立しなければならないことを、世界觀的人格典型の個性的普遍的統一契機を深く分析し、洞見することによりて究明し、そうして夫れを哲學的基礎として、第三史觀の可能なる所以を論證せんとするのである。それで（七）「哲學の第三根本方針」と題して、本論文の終りに、此の問題を論述するつもりであつたが、最早紙面がなくなつたから、已を得ず、次の論文「第三史觀の根本原理」の始めに之を論述することとする。